

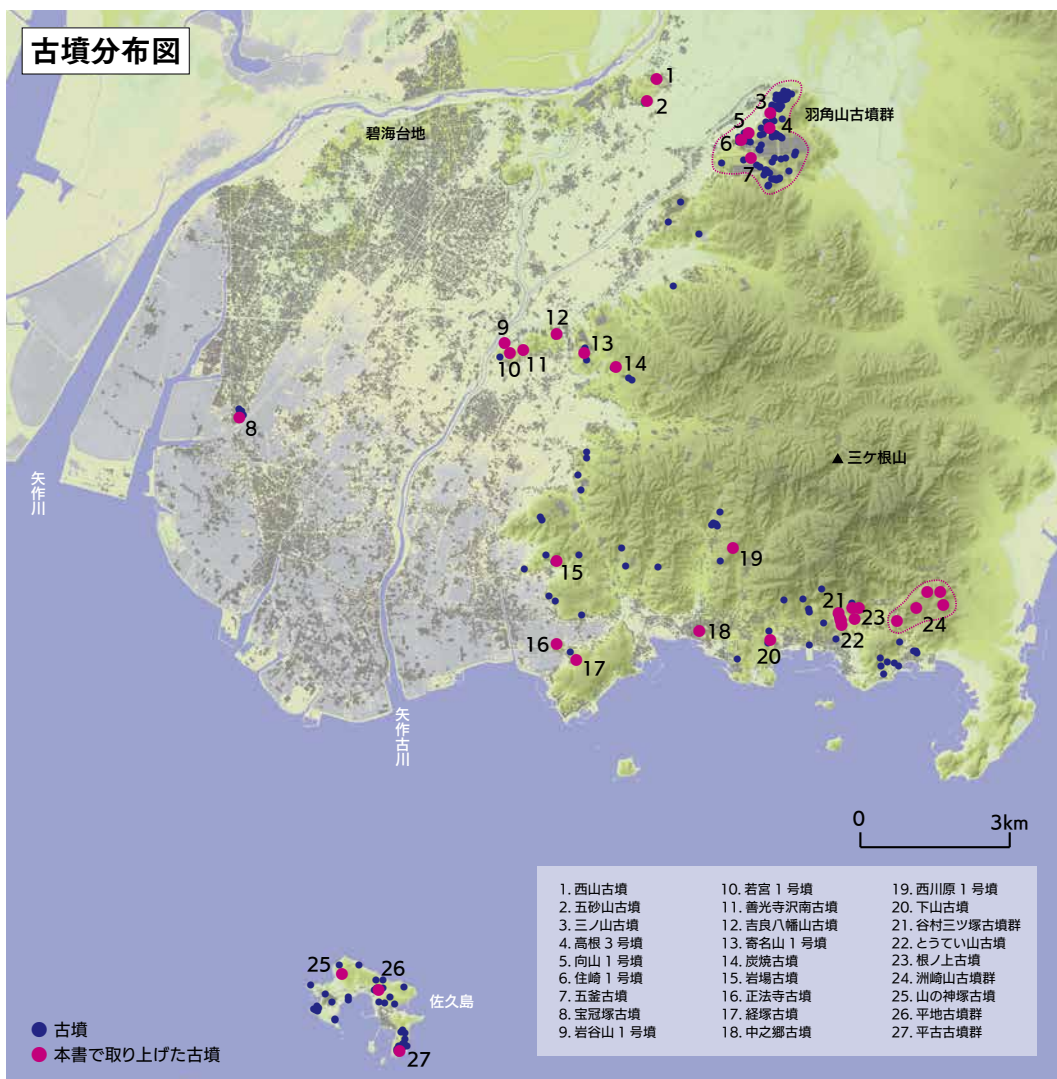
西尾市遺跡解説パンフレット

古墳時代の西尾



西尾市教育委員会

三河湾に面し矢作川の河口地域に位置する西尾市(旧幡豆郡)地域には、古墳時代を通じて有力な古墳が多数分布しています。中でも古墳時代中期には三河を代表する前方後円墳である正法寺古墳が出現し、その後も岩場古墳や中之郷古墳など特色ある古墳が築かれました。市史編さんに伴う近年の調査成果を含め、古墳からの出土品などを手掛かりに西尾の古墳時代を紹介します。



西尾市内には271基の古墳が確認されています。古墳は主に東部丘陵や三ヶ根山から南へ伸びた丘陵上に造られており、市域西側の碧海台地上では南端の刈宿町付近に6基が分布するのみです。市域の沖積低地のうち、沿岸部は近世以後に開かれた干拓地で、古墳時代にはさらに現在の中心市街地付近まで海が入り込んでいたと推測されています。

佐久島では古墳時代後期になると古墳の築造が始まり、終末期に至るまで47基の古墳が島内全域に築かれます。また、上羽角町から下羽角町にかけての丘陵上には117基の古墳が分布し、羽角山古墳群と総称されています。

表紙写真：(左上から) 中之郷古墳出土の石見型埴輪・炭焼古墳出土の銀象嵌装大刀・岩場古墳出土の埴輪・三ノ山古墳の横穴式石室(*石室内の石造物は後世に設置されたものです。)・正法寺古墳測量図・とうてい山古墳の出土品・若宮1号墳出土の四獣形鏡

古墳時代のはじまり

～古墳時代前期～

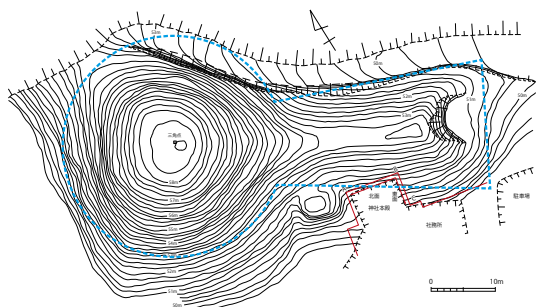


全国各地で大きな古墳が競うようにして築かれた3世紀後半から7世紀までの期間を古墳時代と呼びます。約350年間続いた古墳時代は、墳丘の形状や埋葬施設、副葬品の内容などが時期によって大きく変化するため、4つの時期に区分して理解されています。

吉良町の岡山丘陵上には、古墳時代前期に築かれた古墳が3基現存しています。吉良八幡山古墳、善光寺沢南古墳、若宮1号墳の3基で、岡山丘陵の南側にひらけた横須賀地区を本拠とした3代の有力者の墓と考えられます。

吉良八幡山古墳(吉良町岡山／4世紀前～中葉)

岡山八幡社の裏に位置する全長66mの前方後円墳で、市内で最初に築かれた古墳と考えられています。発掘調査は未実施ながら、自然地形の改変が最小限で前方部が細長い形状から古墳時代前期中頃の築造と推定されます。社殿の工事の際の立会調査で葺石の可能性の礫が確認されています。



善光寺沢南古墳(吉良町岡山／4世紀中葉)

平成28年に実施された発掘調査の結果、長さ約30mの方墳で葺石はなく、墳丘の中段に壺形埴輪が並べられていたことが判明しました。壺形埴輪は高さ約90cmの朝顔形埴輪のような特異な形状で、市内で最初に採用された埴輪と考えられます。埋葬施設は未調査のため不明です。



発掘調査の様子



壺形埴輪

若宮1号墳(吉良町岡山／4世紀中～後葉)

墳丘は約30mの方墳または円墳で、大正時代の発掘により出土した四獣形鏡・鉄剣・鉄鑿・鉋などの副葬品が現存しています。副葬品の特徵から善光寺沢南古墳に後続する前期末に築かれた古墳と考えられます。



古墳の現況



四獣形鏡

五砂山古墳(東浅井町／4世紀中～後葉)

市域北部の東浅井町の丘陵頂部に単独で立地する直径約20mの円墳。鉄鑿・鉄剣・鉄斧・鉄鑿・鉋が出土しており、前期末に築かれたと考えられます。



鉄製品

正法寺古墳の築造とヤマト王権とのつながり

～古墳時代中期～



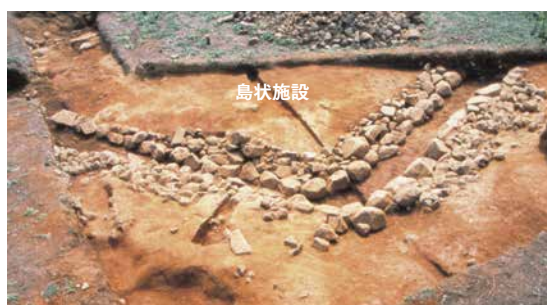
古墳時代の中期は最も古墳が巨大化する時期で、世界遺産に指定された大阪府の百舌鳥・古市古墳群の大王墓が築かれた時代に相当します。西尾市域では、吉良町の沿岸部に墳長94mの正法寺古墳が築かれた後、岩場古墳、寄名山1号墳、中之郷古墳など埴輪や葺石を有する首長墳が築られました。これらの古墳はいずれも帆立貝形古墳であった可能性があり、埴輪や副葬品に百舌鳥・古市古墳群と密接なつながりを示す特徴が認められることから、ヤマト王権にとって三河湾沿岸地域が戦略的に重要な地域であったことがうかがわれます。

しょうぼうじ 正法寺古墳(吉良町乙川／4世紀後葉) 国指定史跡

墳丘は整った3段で、墳丘斜面に葺石が葺かれた墳長94mの大型前方後円墳です。同時代では三河最大規模の古墳で、古墳時代の中期初めに新たに台頭した勢力の墓と考えられます。三河湾に突き出した当時の半島の先端に位置する立地や、同時期に築かれた三重県松阪市の宝塚1号墳と墳丘形態が類似することなどから、畿内から東国への経路にあたる三河湾・伊勢湾の水上交通を掌握した人物の墓と考えられています。



墳丘の現状(右:後円部 左:前方部)



平成14年発掘調査



円筒埴輪

いわば 岩場古墳(吉良町小山田／5世紀前～中葉) 県指定史跡／県指定文化財

正法寺古墳から北に1.7kmの丘陵上に位置する墳長約30mの帆立貝形古墳。昭和26年に行われた発掘調査で県内唯一の円筒棺が発見され、副葬品として勾玉や管玉、鉄刀や農工具などが出土しました。前方部からは円筒埴輪を転用した埴輪棺が見つっています。円筒棺の採用や畿内的な埴輪や鉄鏃の出土から、正法寺古墳以降の首長もヤマト王権との密接な関係を維持していたことがうかがえます。



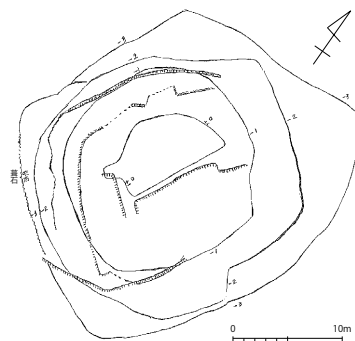
円筒棺出土状況



出土品

きょうづか 経塚古墳(吉良町乙川／4世紀後～末葉)

正法寺古墳から400m東の丘陵上に位置する直径約30mの2段築成の円墳であったとされます。正法寺古墳と類似する埴輪が出土していることから、正法寺古墳の被葬者を補佐した人物または次代の首長墓と考えられます。



なかの とう

中之郷古墳(西幡豆町／5世紀後葉)市指定史跡

江戸時代から石室が開口しており、別名を穴観音古墳といいます。東海地方で最も早く横穴式石室を採用した古墳の一つとして知られ、石室の特徴や副葬された馬具の特徴から北部九州との関連が指摘されています。平成25年度の発掘調査で墳丘の裾を示す葺石が確認され、円墳といわれていましたが帆立貝形古墳の可能性が出てきました。周溝内からは大阪府の百舌鳥古墳群などに出土例の限られる出現期の石見型埴輪が出土しており、当地域に最新の埴輪の情報がもたらされていたことが明らかになりました。



横穴式石室



石見型埴輪



墳丘裾の葺石(平成25年度)

きなやま

寄名山1号墳

(吉良町駸馬／5世紀前～中葉)

瀬門神社の社殿東の丘陵に位置する古墳で、墳形は帆立貝形古墳または方墳と考えられます。岩場古墳と共通する特徴をもつ埴輪が出土していることから同時期の古墳と考えられます。



発掘調査で見つかった墳丘裾の葺石

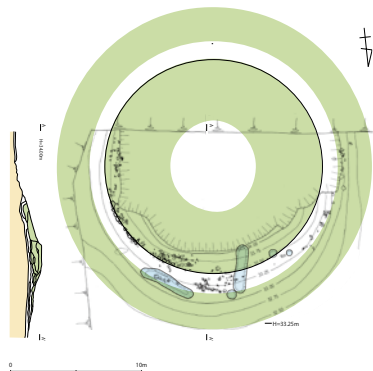


石製紡錘車

にしやま

西山古墳(東浅井町／5世紀末葉)

市域北部の丘陵上に単独で立地する直径23mの2段築成の円墳です。墳丘の中段には円筒埴輪が並べられ、家・馬・武人・鶏・蓋・石見型などの多彩な形象埴輪が出土しました。市内では唯一の人物・動物埴輪を並べた有力古墳でしたが、昭和57年に埋葬施設を含む古墳の主要部分が未調査のまま破壊されてしまったことは残念ではありません。



墳丘の葺石と円筒埴輪列(昭和58年)



円筒埴輪と形象埴輪

むかいやま

向山1号墳(上羽角町／5世紀後～末葉)

羽角山古墳群の向山支群に位置する直径約17mの円墳です。羽角山古墳群は、古墳時代後期(6世紀)中葉以降に盛行する群集墳ですが、埴輪片が採集されたことにより本古墳が中期後葉にさかのぼる古墳であることが判明しました。



墳丘の現況



円筒埴輪

横穴式石室をもつ群集墳の時代

～古墳時代後期～



古墳時代後期の中頃になると横穴式石室が埋葬施設として普及します。西尾市域では、古墳の規模は首長墳でも直径15～20m程度と前代より小型化し、墳形は円墳のみになります。従来は古墳を築造することがなかった階層にまで古墳づくりが拡大し、直径10m以下で横穴式石室をもつ小型墳が、東部地区や吉良・幡豆地区の丘陵上に多数築かれました。古墳の築造は6世紀後葉から7世紀前葉にかけて最盛期を迎えます。

とうてい山古墳

(東幡豆町／6世紀後葉)市指定史跡

東幡豆小学校北側の丘陵上に位置する直径約18mの円墳です。内部の横穴式石室は市内最大で、玄室の空間はちょうど6畳間ほどの規模があります。昭和39年に石室内が盗掘され、完形の須恵器が多数掘り出されましたが、散逸してしまいました。昭和42年(つひ)に正式な発掘調査が行われ、馬具轡3組、鍍金が施された馬具の飾金具、大刀、多数の鉄鏃、勾玉、ガラス小玉、切子玉、耳環など首長墳にふさわしい豊富な副葬品が出土しました。現在古墳は整備されて公開されています。(石室内の見学はできません。)



横穴式石室(内部には佐久石製の石棺が安置されている)



出土遺物

やむら み つづか

谷村三ツ塚古墳群

(東幡豆町／6世紀末葉～7世紀前葉)

とうてい山古墳の付近に位置する6基の古墳からなる古墳群です。このうち3号墳を中心に遺物が出土したとされ、把手付椀(下写真中央左)は朝鮮半島産の陶質土器の可能性がありま



3号墳出土遺物

したやま

下山古墳 (東幡豆町／6世紀末葉)

開発事業に伴って昭和63年に発掘調査が行われました。直径15mほどの円墳で、横穴式石室からは須恵器類のほか、馬具轡2組・鉄刀・鉄鏃・弓飾金具など比較的豊富な副葬品が出土しました。とうてい山古墳に続く東幡豆地域の有力者の墓と考えられます。



(写真提供: (公財)愛知県教育スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター)

すみやき

炭焼古墳 (吉良町駿馬／7世紀前葉)

東条城跡から炭焼川に沿って1kmほど奥まった丘陵上に位置する直径7.5mほどの小円墳で、ほ場整備工事中に偶然に発見されました。横穴式石室も小規模なものでしたが、副葬品に馬具が含まれ、銀象嵌装の大刀が出土したことが注目されます。象嵌装大刀は被葬者の戦功に対するヤマト王権からの下賜品であった可能性が考えられます。



銀象嵌装大刀



発掘調査(平成7年)



須恵器出土状況

古墳の終焉と律令制度の普及

～古墳時代終末期～



畿内で前方後円墳が造られなくなる7世紀代は、全国的に中国の隋や唐に習った律令国家体制の整備が進められる時代にあたります。西尾市域では引き続き古墳が築かれ、岩谷山1号墳や根ノ上古墳のように大型の石室を有する首長の墓が確認されています。一方で、西川原1号墳は横穴式石室をもつ古墳ですが、畿内とのつながりを示す帯金具や畿内系土師器が出土し、古墳の被葬者は律令体制下の幡豆郡の役人と想定され、この地域にも行政制度が整いつつあったことがうかがえます。

市内では7世紀末になると古墳の築造は終息にむかい、古墳に代わる首長層の権威の象徴として新たに古代寺院が建立されるようになります。

いわだにやま

岩谷山1号墳

(吉良岡山／7世紀中葉)市指定文化財

岡山丘陵上の西端に位置した直径14mの円墳です。横穴式石室は当該期の西三河では最大規模を誇ります。副葬品の金銅装大刀はヤマト王権から下賜されたものと考えられます。石室は西尾市塩田体験館に移築されています。



移築前の横穴式石室(昭和52年)



大刀の鞘に巻かれた金銅板の一部

にしがわら

西川原1号墳(西幡豆町／7世紀末)

大正年間に地元住民によって横穴式石室が発掘され、佐久石製の石棺などが掘り出されました。平成11年の正式な発掘調査では帯金具や畿内系土師器が出土しています。銅製の帯金具には朝鮮半島で産出された銅が使用されていることが判明しています。



革ベルトの金具



畿内系土師器

ねのうえ

根ノ上古墳(東幡豆町／7世紀後葉)

大型の墳丘・石室をもつ古墳で、下山古墳に続く首長の墓と考えられています。昭和60年、土地改良工事に伴う事前調査によって発見されました。



ほうかんづか

宝冠塚古墳(刈宿町／7世紀後葉)

碧海台地南端に築かれた刈宿古墳群の一基。石室の石材に佐久石が使用され、被葬者は三河湾内の交易を担った人物であったと考えられています。



すさきやま

洲崎山古墳群(東幡豆町／6世紀末～7世紀後葉)

愛知こどもの国の園内には5基の古墳が分布し、洲崎山古墳群と総称されています。現在でも1～4号墳の石室を見学することができます。



洲崎山3号墳

は すみやま 羽角山古墳群

一県下最大級の古墳群—

上羽角町から下羽角町にかけての丘陵上に所在する羽角山古墳群は、100基を超える古墳が分布する県内でも最大級の古墳群です。古墳群は6世紀中葉～7世紀末にかけて南北約2kmの広範囲に築かれています。古墳は尾根上や緩斜面に築かれ、地形や群集の状況から12の支群に分けられています。

すみさき

住崎1号墳(下羽角町／6世紀中葉)

古墳群内最大で、最も古い横穴式石室をもつ古墳です。古墳群内では唯一馬具が出土しており、この地域の有力者の墓と考えられます。

※石室は(株)デンソー西尾製作所内に位置するため見学はできません。



さんのやま

三ノ山古墳(上羽角町／7世紀前葉)

古墳群内で唯一単独で築かれた古墳です。大正時代に描かれたスケッチが残っており、大型の横穴式石室には現在でも入ることができます。



ごかま

五釜1号墳(下羽角町／7世紀後葉)

ほうろく ふもと
炮烙山の麓の谷田を望む丘陵先端に立地する古墳で、昭和43年に発掘調査が行われました。現在は三和小学校の校庭に移築されています。



たかね

高根3号墳(上羽角町／7世紀末)

墳丘の高まりがほとんどなく、石室も全長3mと必要最小限の空間のみ確保されているなど、古墳の最終末の様相を現しています。



佐久島の古墳

—海に浮かぶ古墳群—

佐久島には47基の古墳が分布し、山の神塚古墳などが散在する西区、中央低地部とその周辺に平地古墳群などが立地する中央地区、平古古墳群などが分布する東地区に分けることができます。中央地区の秋葉山山頂に築かれた秋葉山1号墳が最も古いと推定され、以後7世紀末に至るまで継続的に古墳が築造されました。

やま かみつか

山の神塚古墳(西区／7世紀中葉)市指定史跡

島内最大規模の横穴式石室をもつ古墳で、知多半島を望むことができる丘陵斜面に築かれています。島内の他の群集墳とは異なり、単独で築かれていることから本墳の被葬者は島内屈指の有力者と考えられます。



ひらち

平地古墳群(中央地区／7世紀中葉)

島中央部の標高8~14mの丘陵上に築かれた4基の小型円墳で構成される古墳群です。古墳群の眼下に広がる砂浜では土器製塩が行われ、古墳の被葬者が塩づくりに関わった人物であったと想定されています。



平地1号墳

ひらこ

平古古墳群(東地区／7世紀前～中葉)

島東部の南に突出した岬の上の平坦面に分布する7基の小型円墳で構成される島内最大規模の群集墳です。近年、「島を美しくつくる会」によりボランティアの協力を得て竹林の伐採が行われたため、石室が残る群集墳の様子を見学することができます。



平古2～6号墳